論文

比嘉村落の女性の漁撈活動からみた生計維持についての考察

――1980 年代以前の漁撈活動を中心に――

新　垣　夢　乃
ARAKAKI Yumeno

はじめに

サンゴ礁の発達した沖縄においては，そこで形成されるリーフ内において日常的に漁撈活動を行ってきた．そこで得られる魚介類は，歴史的にみて沖縄の人々の生活に重要な意味と価値をもっていたと考えられる．

そのような沖縄の海と人との付き合いについては，従来，沖縄県糸満市（以下，糸満とする）の人々に対して集中的に研究視点が向けられてきた．これは，沖縄において最も古くから専業化した男性たちの漁業とそれと組み合わさった女性たちの魚介類の行商に関連したさまざまな視点から注目されてきたものである．

しかし，沖縄においては広く女性たちも漁撈活動を行ってきた事実がある．このように女性たちの視点から沖縄の漁撈活動を捉えた場合，そこにはいくつかの糸満とは異なるあり方がみえてくる．そのなかで女性の漁撈活動が活発に行われてきた沖縄県うるま市字比嘉地域（以下，比嘉村落とする）を本研究では取り上げた．そこで女性たちはどのような漁撈活動を行い，どのように獲得した魚介類を消費し，またどのような漁場利用を行ってきたのかを調査し，それを分析することで比嘉村落の女性たちの漁撈活動がその生計維持の上でどのような目的と意味をもっていたのかという分析を試みた．

Ⅰ　先行研究

(1)　糸満女性の研究

沖縄の漁撈活動に関して，最も初期に強い影響を与えたのは河上肇の研究である．河上は，1911 年 4 月に沖縄の地割制度調査のために来沖している．その際，伊波普猷に伴われて沖縄本島南部の糸満を訪れている．そこで，糸満の女性たちのワタクサーとよばれる私財に注目し，農地の乏しさから漁業へ特化した糸満において，家族間における個々人の独立が促され個人主義的な経済・家族形態が形成されたという研究成果を残している（河上 1982）．

この河上の驚きと問題提起を契機として，糸満についての研究が蓄積されることとなる．その後，河上の提起した個人主義的形態の問題を取り上げた研究蓄積も存在する（奥野 1977；野口 1969）．

また，具体的な糸満の女性たちの魚の行商などについての民俗，人類学的な研究が現在まで多数蓄積されその詳細な世界像をみることができる．例えば，加藤久子は，糸満の魚の行商を行う女性たち

のライフヒストリー的な研究成果を残している（加藤 1990；1994）．また，川端牧は，糸満の魚の販売を行う女性たちが，個々の魚種についての深い民俗知識と魚の質や季節を合わせた魚の価値体系をもち，それが対面販売の場でいかされているという研究成果を残している（川端 1998）．このような研究には，瀬川清子の示した研究の流れが影響を及ぼしていると考えられる．瀬川は，戦前から戦後を通して海女と行商人を主な対象として，漁村女性の就業の問題を扱っている．そこで，瀬川は，漁村女性の就業が漁撈活動だけではなく，行商，加工，農業，賃金労働などに多就業化している実態を示し，それが，商業，加工業，運送業の産業化と発展に伴って女性たちの現金収入獲得手段を奪っていったという研究成果を残す（瀬川 1976）．このような研究は，女性たちのおかれた現実的な問題とも結びつき重要性を増すものである．そのため，このような研究が後の研究に大きな影響を及ぼすことも大切なことである．

しかし，行商や海女などに関わる女性たちというのは象徴的な存在であるが，それだけが海と女性たちの関わり方の中心であったわけではないし，沖縄の女性たちを考える場合は多少異なった視点が必要となる．それは，さまざまな研究や地域誌などからもうかがえるが，ここでは沖縄地域に対象を絞り明治 23 年の統計資料をもとに，海と女性たちの関わりのいくつかのあり方をみてみる．この統計では，明治 23 年当時の沖縄県全域が対象となっている．この統計の特徴としては，離島（石垣島，宮古島を除く）については島ごとの単位であるが，その他の地域については村落レベルで「漁人」数を集計した点にある．このように村落レベルで「漁人」数を集計した統計としては，明治 23 年の統計は最も古いものである．そのため，歴史的な視点から沖縄全域の漁撈活動の実態を考える際には，この資料は重要である．また，もうひとつこの統計の特徴としてあげられるのは，各村落の漁人の専業者と兼業者の内訳，男性と女性の数の内訳を示している点である．これは，各村落における漁撈活動に関わる社会構造を考える際に重要である．さらに重要なのは，この統計における女性のあらわれ方に注目することによって，少なくとも明治中期までは女性たちの漁撈活動への関わり方のタイプがいくつか存在していたことが考えられることである．

この明治 23 年の統計には，沖縄県内全域の 64 地域で統計が集計されている．そのうち，専業漁人が存在する地域が 17 地域存在する．さらに，そのなかには専業漁人のみ存在する専業漁人専一地域と兼業漁人が混在する専業兼業漁人混在地域とがある．そして，その他の 47 地域は，すべてが兼業漁人のみである兼業漁人専一地域となっている．

表 1　明治 23 年の沖縄県における漁業者数とその内訳

（この表は，沖縄県内務部第一課『沖縄縣統計書』明治 23 年，沖縄県庁，1892 年をもとに作成した．）

全体（64 地域）

地域	漁人数	専業者数	専業（男性）	専業（女性）	兼業者数	兼業（男性）	兼業（女性）
沖縄県	4114	1432	1398	34	2682	2185	497

専業漁人専一地域（7 地域 約 11%）

地域	漁人数	専業者数	専業（男性）	専業（女性）	兼業者数	兼業（男性）	兼業（女性）
瀬底	12	12	12				
辺名地	15	15	15				
渡久地	6	6	6				

浜元	24	24	24				
東江	2	2	2				
城	5	5	5				
宮里	4	4	4				

専業兼業漁人混在地域（10 地域 約 16%）

地域	漁人数	専業者数	専業（男性）	専業（女性）	兼業者数	兼業（男性）	兼業（女性）
糸満	1230	1062	1062		168	168	
泊浦	38	2	2		36	26	10
久高	445	187	187		258		258
親湊	257	75	41	34	162	93	89
塩屋	41	1	1		40	40	
粟国	235	235			235	235	
鳥島	184	1	1		183	183	
大川	20	16	16		4	4	
白保	20	14	14		6	6	
与那国	8	6			2	2	

兼業漁人専一地域（47 地域 約 73%）

地域	漁人数	専業者数	専業（男性）	専業（女性）	兼業者数	兼業（男性）	兼業（女性）
浜比嘉	59				59	29	30
板良敷	63				63	63	
奥武	62				62	62	
平敷屋	60				60	30	30
津堅	111				111	50	61
屋慶名	12				12	12	
平安座	25				25	25	
高離	20				20	20	
伊計	21				21	21	
瀬名波	18				18	18	
長浜	24				24	24	
古知屋	8				8	8	
崎本部	9				9	9	
備瀬	21				21	21	
小浜	15				15	15	
古宇利	12				12	12	
運天	6				6	6	
上運天	6				6	6	
親泊	6				6	6	
今帰仁	4				4	4	
稲嶺	11				11	11	
済井出	12				12	12	
屋我	3				3	3	

仲尾次	7				7	7	
辺土名	4				4	4	
宇嘉	4				4	4	
辺戸	44				44	44	
仲泊	6				6	6	
前兼久	4				4	4	
谷茶	8				8	8	
瀬良垣	4				4	4	
名嘉真	3				3	3	
久志	3				3	3	
辺野古	5				5	5	
天仁屋	3				3	3	
川田	4				4	4	
伊是名 具志川 野甫	176				176	176	
阿嘉	36				36	36	
渡嘉敷	40				40	21	19
渡名喜	255				255	255	
真泊	56				56	56	
嘉手苅	20				20	20	
西原	40				40	40	
池間	70				70	70	
前里	68				68	68	
松原	59				59	59	
久貝	63				63	63	

これを細かくみると，当時の沖縄では，専業漁人はほとんどが男性であったが，親湊だけには女性の専業漁人がいることは興味深い．また，ここからわかるのは，当時の沖縄においては，糸満のように専業漁人が存在するのは少数地域であったということである．いいかえれば，兼業漁人がいる海に特化しない生業形態が一般的であったということである．さらに，専業兼業漁人混在地域のうち久高においては，すべての兼業漁人が女性のみによって構成されている点も興味深い．そして，この兼業漁人専一地域の 47 地域においても，女性という視点から分析するといくつかの類型がみえてくる．そのうち，すべて男性のみで構成されている全男性型は 43 地域，男性・女性混合型は 4 地域存在する．この男性・女性混合型の 4 地域のうち平敷屋，渡嘉敷では男性と女性の数がほぼ拮抗し，浜比嘉や津堅においては女性の数が優勢となっている．そこから次のような地域類型を考えることができる（表 2 を参照）．

この類型は，女性に視点をおいて分析したものであるが，この統計に登場する女性は 4114 人中 531 人と全体の約 13% であり，男性の漁人数に比して絶対的に少数者であることも事実である．また，この統計は，あくまでも「漁人」を基準にして作成されたものである．この「漁人」がどのような意味で用いられたのかを明らかにするのは今後の課題である．そして，ここに登場した「漁人」としての女性たち以外にも，女性たちと海との関わりのひとつである自給的な漁撈活動の活発さは，さ

表 2　漁人からみた地域類型

専業漁人専一地域	全男性型
	男性・女性型（特殊）
専業兼業漁人混在地域	全男性型
	男性・女性型（そのうち久高の特殊性）
兼業漁人専一地域	全男性型
	男性・女性拮抗型（平敷屋，渡嘉敷）
	女性優勢型（浜比嘉，津堅）

まざまな研究や地域誌から確認できる．つまり，ここで「漁人」として登場した女性たちもひとつの特殊であったものとも，女性たちの自給的な漁撈活動の延長線上に特徴的にあらわれたものとも考えられる．

しかし，この「漁人」の存在が，沖縄の漁撈活動の形態をあらわす一定の指標となることは確かである．つまり，その地域の何らかの形の漁撈活動が，この「漁人」の統計にあらわれていると考えられる．そのことから漁撈活動と連動した行商などの商業的な分業を担った女性たちを中心的に扱うことは，全体の一面を捉えることであったといえる．そのために，ここで特徴的にあらわれてきた「漁人」としての女性たちの活動を捉えることが沖縄の女性たちと海との関わりのあり方を考える際に重要な意味をもつ．

また，この統計からは，女性の視点から分析することによって，沖縄の内部のいくつかの漁撈活動の類型の可能性を考えることができた．その点をふまえて，女性の視点に立って漁撈活動をみることの重要性がわかる．

現在の沖縄における各地域の漁撈活動については，調査の成果蓄積が発展しつつある．次の段階として，この調査成果を巨視的にみていくことが研究の進展につながると考える．そのために，ここで示したいくつかの類型が有効な指標となり得るのではないかと考える．

(2)　漁場利用の仕組みへの視点

上記のような分析や研究のほかに，人類学等を中心に沖縄の女性たちの漁撈活動に関する研究蓄積も存在する．

沖縄県は，他府県に比べてもいわゆる民俗誌的な形の報告書が膨大な数つくられている地域であるといえる．そして，そのなかでは，どのような魚種をどの漁期，どのような漁具を使い，どのような漁法によって捕獲するかという視点によって多くの報告がなされてきた．

例えば，喜舎場永珣の「八重山に於ける旧来の漁業」(1934 年）は，石垣島を中心に八重山地方の漁撈活動を民俗的な視点から示した最も早い時期の研究成果である．そこで喜舎場は，さまざまな漁法とそこで使用される漁具の使用法，漁にまつわる説話などを記録している（喜舎場 1934)．

しかし，戦後最も早くに沖縄の漁撈活動について人類学的な視点から注目した西村朝日太郎の研究視点は，これらの研究視点とは異なった特徴をもっていた．西村が注目したのは，ある漁場を巡ってどのような社会的な権利関係が構築されているのかということであった．それについて，西村は，長崎県島原地方と沖縄県八重山地方の石干見を巡る地域社会の権利関係のあり方について比較研究を行

っている．そこでは，両地域において石干見の組合的所有と個人的所有のどちらも存在することが指摘されている．そして，沖縄の小浜島の石干見作成に関する証文の分析をもとに，王府の下，その地域の宗教的司祭であり役人でもある「つかさば阿」の俸給の一環として建築されたとした．そして，そこから「政治的・宗教的権威と石干見の所有権とが結合し，共同体の成員の自由な使用・用益が大なり小なり制限を加えられるに至ったものと思われる」（西村 1969：92-93，103，111）という分析を行っている．

また，Tomoya Akimichi（秋道智彌）と Kenneth Ruddle は，沖縄の海における漁場利用の慣習についての研究成果を残している．そのなかでは，沖縄の漁場利用は近代的な漁業協同組合を通して県や国家とつながっているものの，実際の地域社会ではさまざまな慣習によって漁場利用が営まれているという現状が報告された．そして，そのさまざまな慣習があることによって多様な生物の無秩序な利用が防がれていると指摘した（Akimichi・Ruddle 1984：37）．

また，熊倉文子は，久高島の女性たちの漁撈活動について，どこで，いつ，なにを獲り，どう利用するかという視点から詳細な研究を行っている．そこで熊倉は，女性たちの漁撈活動が多様な種類の魚介類を対象とすることから，ひとつの種類が減少しても，他の種類の魚介類を捕獲することで，その間に減少した種類も回復するのではないかと考えている．そして，それによって歴史的に魚介類を捕獲し続けることができたのではないかという考えを示している（熊倉 1998：212-213）．

このような研究において注目されたのは，具体的に女性たちの漁撈活動がどのように行われ，そこにどのような社会的仕組みが存在し，それらが生計維持という点からみたときどのように機能してきたのかということであった．

(3) 視点の整理

ここまで，沖縄を中心に女性たちと漁撈活動との関わりについて 2 つの先行研究の流れをみてきた．それを踏まえ，ここでは本論における研究視点と目的を設定する．

まず明治 23 年の統計の分析から，女性の漁撈活動への関わり方をみることが個々の地域の漁撈活動のあり方を分析するために重要な視点となる可能性を示した．そして，それは，沖縄のなかの漁撈活動への関わり方にいくつかのタイプが存在することを示し，個々の地域の漁撈活動を沖縄全域的な広い視野から位置付けられる可能性を指摘した．そのなかで，糸満の女性とは異なる意味で特殊であると捉えられるいくつかの地域の姿が浮かび上がってきた．

また，もうひとつの研究の流れのなかでは，実際の女性たちの漁撈活動の実態とその意味についての分析と重要性が指摘されてきた．

そこで本論では，統計の分析結果から，糸満の女性とは異なる特殊性をもつ地域としてみえてきたいくつかの地域のうち，浜比嘉島の比嘉村落を取り上げる．そして，その比嘉村落の女性たちの漁撈活動の実態と，それが生計維持の上でどのような意味をもってきたのかという視点からそれを明らかにする．そして，それが従来の研究で調査されてきた糸満や久高島などの女性たちのそれと，どのように異なり，どのような点で同じなのかを分析し，比嘉村落の女性たちの漁撈活動からみた生計維持の仕組みと，そこに込められた考え方を位置付けていくことを本論の目的とする．

Ⅱ　比嘉村落の女性たちの漁撈活動

(1)　比嘉村落の概況

沖縄県うるま市字比嘉は，沖縄本島中部西海岸にある勝連半島から東方の沖合約 4 km の海上に位置する浜比嘉島のなかにある行政区のひとつである．

図 1　浜比嘉島の位置
（『うるま市統計書』創刊号平成 17 年版をもとに作成した.）

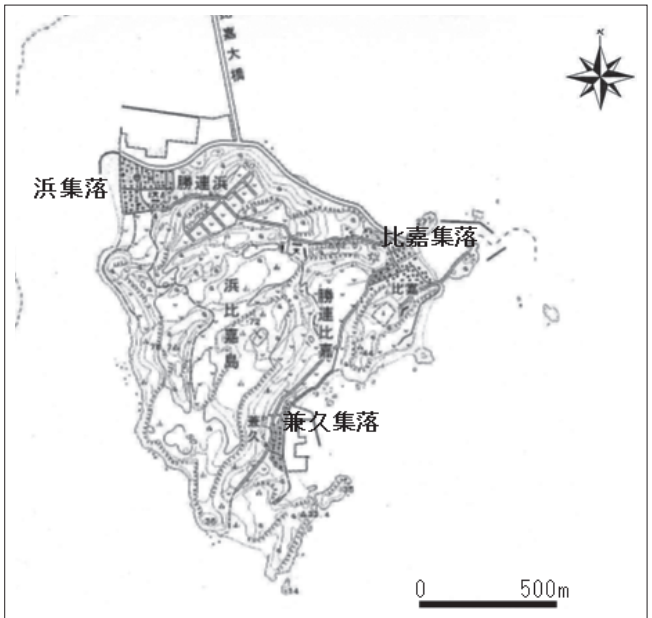


図 2　浜比嘉島の集落
（『25000 分の 1 地形図（屋慶名・平成 17 年)』（国土地理院）をもとに作成した.）

浜比嘉島は，1972 年に隣接する平安座島と本島を結ぶ海中道路が完成し，1997 年には浜比嘉大橋の完成により，比嘉村落から本島まで陸路を使っての行き来が可能となった．それ以前は，浜比嘉島と沖縄本島とは渡し船によって結ばれていた．

この浜比嘉島には，2 つの行政区，浜と比嘉とがある．さらに，この行政区比嘉には，比嘉集落と兼久集落という 2 つの集落が存在する．この兼久集落は，大正期に比嘉集落の住民が移住し形成された集落であり，現在でも，比嘉集落とのつながりが強い集落である．また，行政上も，比嘉集落と兼久集落は，字比嘉として機能している．そのため，本論では，比嘉村落とよぶ場合には，比嘉集落と兼久集落をあわせた意味で使用することとする．

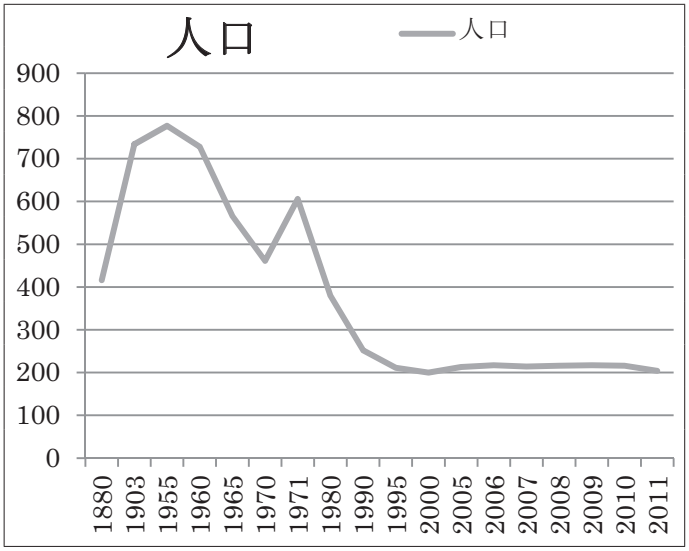
この比嘉村落については，多和田真淳による考古学的調査によって，1500 年前から 2000 年前には，人が生活した痕跡があると報告されている（多和田 1980：163)．

さらに，1635（寛永 12，順治 10，永暦 7）年に記された『琉球国高究帳』には，「ばま嶋」とのみ記載されている（沖縄県沖縄史料編集所 1981)．その後，1713（正徳 3，康熙 52）年に記された『琉球国由来記』には，「比嘉村」と記されている（外間，波照間 1997)．そのことから，1635 年ころまでは，比嘉村落は，行政的には隣接する浜村落と一緒になっており，その後，独立したと考えられる．

現在の比嘉村落は，2011 年 10 月 31 日現在で，人口 204（男性 120，女性 84）人である（うるま市

役所 2011 年 11 月 18 日参照）．そして，歴史的にみた比嘉村落の人口の動きは次のようになっている．

表 3　比嘉村落の人口の推移
（『みんぞく』第 19 号，うるま市役所作成の一連の人口統計 http://www.city.uruma.lg.jp/2/1975.html をもとに作成した．）



年	人口
1880	416
1903	734
1955	777
1960	728
1965	566
1970	461
1971	606
1980	380
1990	252

年	人口
1995	211
2000	200
2005	213
2006	217
2007	214
2008	216
2009	217
2010	216
2011	204

比嘉村落の人口の推移をみると，明治初期の 1880 年には 416 人であった人口が，その後の 1955 年までの間に約 800 人まで増加した．しかし，その後は人口減少がおこり，1970 年には 461 人となり，15 年間でピーク時の 1955 年の約 59% にまで減少してしまった．しかし，その後，1972 年の海中道路完成にあわせて，再び人口が増加に転じ，1971 年には 606 人にまで増加している．だが，それも一時的なものであり，その後の 1980 年代からは再び急激に減少している．そして，1990 年代から現在までの時期は，緩やかな人口減少はあるものの，人口 250 人から 200 人の間を維持している．

現在の比嘉村落の人々は，ほとんどが島外への土木建築業の作業員として働きに出るか，漁業を営んでいる．そして，漁業の繁忙期には漁業を手伝い，それが終わると再び土木建築業に戻るというような人も多い．女性も比嘉村落内にはわずかに宿泊施設での仕事などはあるが，ほとんどは島外へと仕事に出ているのが現状である．そのため，比嘉村落において漁業はほとんど唯一の産業であるといえる．

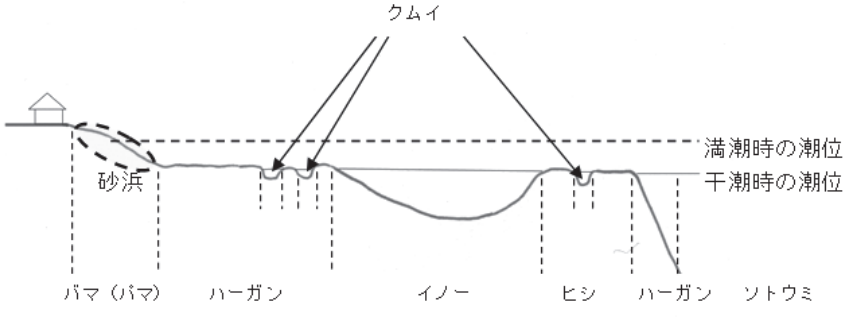


図 3　比嘉村落における海の地形類型

この比嘉村落には現在，勝連漁業協同組合という比嘉村落の周辺海域の漁業権を管理する組合の支部が置かれている．そして，比嘉村落の周辺海域で行われる，ウニ漁やもずく養殖などの際には，漁業協同組合と漁業権というものは明確に意識されている．

しかし，それとは別に比嘉村落の人々の間には，村落の周辺に自分たちの海だという認識をもつ領域が存在しており，そこで比嘉村落の人々は比較的自由な漁撈活動を行っている．このような比嘉村落においては，沿岸域のそれぞれの領域に，比嘉村落の言葉によるバマ，ハーガン，イノー，ヒシ，ハーガン，ソトウミというような地形の類型が存在する．このうち，比嘉村落の女性たちの漁撈活動の活動場所となるのが，バマからイノーの浅瀬である．

比嘉村落においては，1980 年代にもずく養殖を導入した．この比嘉村落周辺海域は，遠浅の広い海域があり，比較的に波が穏やかであることから，現在では日本におけるもずく養殖の一大拠点にまで成長している．

この表のなかで比嘉村落周辺海域は勝連に含まれるが，そこは，沖縄県全体のもずく養殖生産量の約 36% を占めており，他を圧倒する生産量を誇っている．また，沖縄県は，日本全体のもずく養殖生産量の 99% 以上を占めるため，勝連地域の生産量はそのまま全国の生産シェアとほぼ同義となる（沖縄県もずく養殖振興会

表 4　平成 19 年の沖縄県内の各生産地のもずく養殖生産量
（この表は，沖縄県水産課「モズクの養殖生産量，生産地」http://www.pref.okinawa.jp/suisan/mozuku.html をもとに作成した．）

生産地域	生産量（全体に占める割合）
伊平屋	1522 t　（約 7%）
伊是名	1751 t　（約 8%）
今帰仁	179 t　（約 0.8%）
伊江	104 t　（約 0.5%）
本部	318 t　（約 1%）
恩納	1283 t　（約 6%）
宜野座	460 t　（約 2.1%）
金武	367 t　（約 2%）
読谷	28 t　（約 0.12%）
与那城	1150 t　（約 5%）
勝連	**7909 t　（約 36%）**
沖縄市	40 t　（約 0.18%）
知念	3469 t　（約 16%）
座間味	24 t　（約 0.11%）
久米島	1363 t　（約 6%）
宮古島	869 t　（約 4%）
八重山	836 t　（約 4%）
全域	21802 t

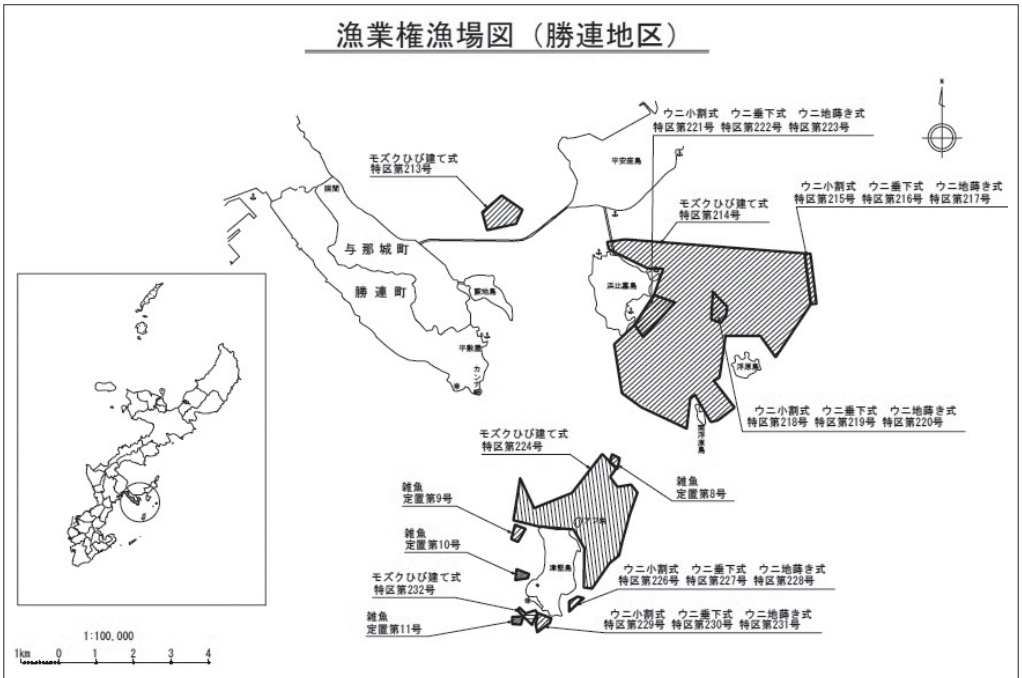


図 4　比嘉村落周辺のもずく養殖申請がなされている海域
（沖縄県水産課「特定区画漁業権，定置漁業権の設定状況」http://www.pref.okinawa.jp/suisan/2gyoumu/tokku-teidhi.pdf，2011 年 11 月 25 日参照をもとに作成した．）

2012).

もずく養殖業は，海底にもずく網を設置して行われるため，もずく養殖業が大規模であればそれだけ海底を養殖網で覆う範囲は広くなる．そのため比嘉村落におけるもずく養殖の発展は，同時に従来からのような漁撈活動に大きな制約を与えるものとなった．そこで本研究では，もずく養殖の発展する 1980 年代をひとつのエポックとして，1980 年代以前の多様な漁撈活動が行われていた時期を中心として，比嘉村落の女性たちの漁撈活動を聞き取り調査によって明らかにしていく．

(2) 比嘉村落の女性たちの捕獲する魚介類とその漁場

ここでは，魚介類ごとに，いつの時期に，どのようにして，どこで獲られるのかをみていく．

表 5　1980 年代以前の比嘉村落における女性と男性の漁業歴

方名		学名	漁期(月) 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	漁法	消費
魚類																
①	スク	スズキ目アイゴ科(稚魚)													女性:網漁 男性:網漁	女性:食用 男性:換金 食用
②	ウンジャミ	スズキ目アイゴ科(稚魚)													女性:網漁 男性:網漁	女性:食用 男性:換金 食用
③	タマン	スズキ目フエフキダイ科 ハマフエフキ													女性:釣漁 男性:網漁 釣漁	女性:食用 男性:換金 食用
④	イラブチャー	スズキ目ブダイ科													女性:突漁 男性:突漁 網漁	女性:食用 男性:食用
⑤	クスク	スズキ目ニザダイ科 ゴマハギ													女性:網漁	女性:食用
イカ類																
⑥	クブシミ	コウイカ目コウイカ科 クブシミ													女性:突漁 男性:突漁	女性:食用 男性:換金 食用
タコ類																
⑦	タク	八腕目マダコ科マダコ、 ワモンダコ													女性:突漁 男性:突漁	女性:食用 効能食 儀礼食 男性:換金 食用
⑧	シーガイ	八腕目マダコ科 テナガダコ													女性:突漁 男性:突漁	女性:食用 効能食 男性:換金 食用
カニ類																
⑨	ガサミ	エビ目ワタリガニ科 ガサミ、タイワンガサミ、 ノコギリガサミ、 ジャノメガサミ													女性:カゴ漁 男性:カゴ漁	女性:食用 男性:換金 食用
貝類																
⑩	カキィー	カキ類													女性:直接採捕	女性:効能食
⑪	チーチャンナー	中腹目ソデガイ科 マガキガイ													女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:換金 食用
⑫	アジケー	異歯目シャコガイ科													女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 効能食 男性:換金 食用
⑬	ブートゥナー	新腹足目イモガイ科													女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
⑭	ブルンナバー	原始腹足目リュウテン科													女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
⑮	クジマ	ヒラザガイ類													女性:直接採捕	女性:食用
⑯	モーモーグヮー	原始腹足目アマオブネ科													女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
⑰	ブラゲー	中腹目フジツガイ科 ホラガイ													女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
⑱	ギブナー	アラスジケンマガイ類 サルボウ類													女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
海藻類																
⑲	スヌイ	モズク類													女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:換金 食用

表6　1980年代以降の比嘉村落における女性と男性の漁業歴

方名		学名	漁期(月)												漁法	消費
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
魚類																
①	スク	スズキ目アイゴ科(稚魚)						▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪					男性:網漁	男性:換金 食用
②	ウンジャミ	スズキ目アイゴ科(稚魚)						▪▪▪	▪▪▪	▪					男性:網漁	男性:換金 食用
③	タマン	スズキ目フエフキダイ科 ハマフエフキ	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	女性:釣漁 男性:網漁 釣漁	女性:食用 男性:換金 食用
④	イラブチャー	スズキ目ブダイ科	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	女性:突漁 男性:突漁 網漁	女性:食用 男性:食用
⑤	クスク	スズキ目ニザダイ科 ゴマハギ														
イカ類																
⑥	クブシミ	コウイカ目コウイカ科 クブシミ	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:突漁 男性:突漁	女性:食用 男性:換金 食用
タコ類																
⑦	タク	八腕目マダコ科マダコ、 ワモンダコ	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:突漁 男性:突漁	女性:食用 効能食 儀礼食 男性:換金 食用
⑧	シーガイ	八腕目マダコ科 テナガダコ	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪						▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:突漁 男性:突漁	女性:食用 効能食 男性:換金 食用
カニ類																
⑨	ガサミ	エビ目ワタリガニ科 ガサミ、タイワンガサミ、 ノコギリガサミ、 ジャノメガサミ	▬	▬	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▬	▬	女性:カゴ漁 男性:カゴ漁	女性:食用 男性:換金 食用
貝類																
⑩	カキィー	カキ類														
⑪	チーチャンナー	中腹目ソデガイ科 マガキガイ				▪▪▪	▬	▬							女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:換金 食用
⑫	アジケー	異歯目シャコガイ科	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 効能食 男性:換金 食用
⑬	ブートゥナー	新腹足目イモガイ科	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
⑭	ブルンナバー	原始腹足目リュウテン科	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
⑮	クジマ	ヒラザガイ類	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:直接採捕	女性:食用
⑯	モーモーグゥー	原始腹足目アマオブネ科	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
⑰	ブラゲー	中腹目フジツガイ科 ホラガイ	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
⑱	ギブナー	アラスジケンマガイ類 サルボウ類	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	▪▪▪	女性:直接採捕 男性:直接採捕	女性:食用 男性:食用
	海草 海藻 類															
⑲	スヌイ	モズク類	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	▬	男性:養殖	男性:換金 食用

①スク

スクとは，アイゴ類の稚魚のことである．この稚魚であるスクは，沖合でふ化した後，旧暦の6，7，8月の1日前後に比嘉村落の陸地に群れをなして近寄ってくる．

1，女性たちのスク漁

時期になり陸地に近寄ってくるスクを女性たちは歩けるほどの水深の海域で，サデアミとよばれる，1，2人で構えることのできる網を利用して捕獲する．漁法としては，1人で行う場合と，2，3人で行うものがある．1人で行う場合は，サデアミを構え，構えたところにスクがやってきたらすくうというものである．2，3人で行う場合は，1人か2人が大きめのサデアミを構え，もう1人が海面を叩いたりしてスクをサデアミに追いたててスクを捕獲するというものである．このようにして獲られたスクは，獲ったその日は酢味噌や酢醤油につけてスクの毒針を溶かし刺身にして食べられた．そ

の後は，ガラスーとよばれる塩漬けにされて保存食となった．このようにして女性たちの獲ったスクは，自分たちの家庭で消費された．このような女性たちのスクを対象とした漁撈活動であるが，1970年代からスクの回遊が少なくなったために，現在は行われなくなっている．

2，男性たちのスク漁

男性たちは，誰かがスクの群れを確認すると，その場ですぐに集合できる者たちで10人前後のグループをつくり舟で出漁する．そして，イノー内の広い海域でスクアミとよばれる網を使って追い込み漁を行いスクを獲る．そして獲られたスクは，参加したメンバーに均等に分配される．その際には，漁に参加した舟やスクアミも1人分として均等に配分され，その所有者は他の人より多くの分配がある．このようにして獲られたスクは，市場に販売される物が主で，他にもガラスーや刺身にして自家消費された．1970年代ころまでは例年のようにスクの回遊があったが，近年では回遊してくる年が少なくなっており，「スクはボーナスみたいなもの」というように稀に得られるものという状況になっている．

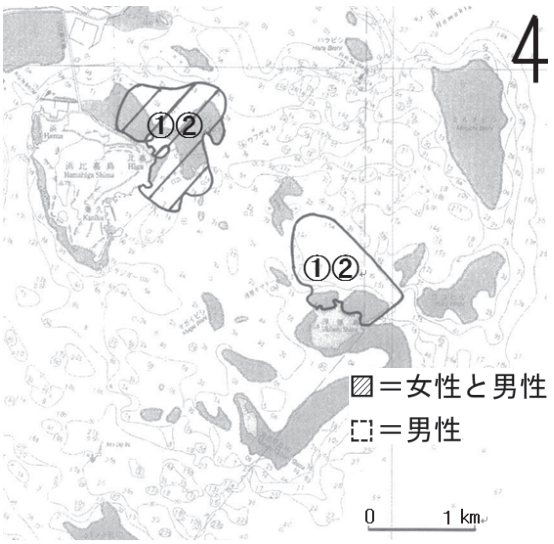


図5　スク，ウンジャミの漁場
（『1：40000金武中城港中城湾（分図1：10000徳仁港）』海上保安庁作成，2011年3月刊行をもとに作成した．以下，図5から図15まで同じ地図をもとに作成した．）

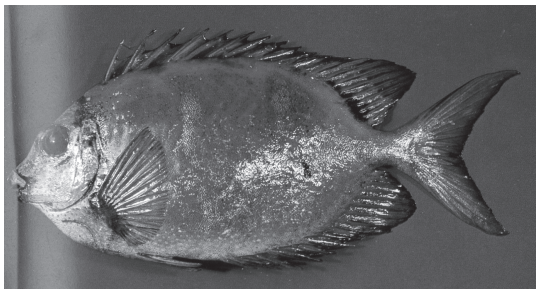


写真1　スク
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977年より．）

②ウンジャミ

ウンジャミも，スクと同様にアイゴ類の稚魚のことである．しかし，スクよりも赤みを帯び，小さいという身体的な違いがある．また，ウンジャミもスク同様に特定の時期に陸地に群れをなして近寄ってくるのであるが，その時期についてもスクとは異なる．比嘉村落では，ウンジャミは，毎年旧暦5月4日のユッカヌヒーという豊漁祈願の年中行事から旧暦6月26日のシヌグとよばれる年中行事までの間に寄ってくるという．

漁法と消費のされ方については，先述のスクと同様である．最後に，このウンジャミの回遊があったのは1970年代前半の頃であった．近年では，ウンジャミはスクよりもさらに見かけないものとなっている．

③タマン

タマンは，和名ではハマフエフキという魚で，大きなものは体長80 cmを超すものもある．そして，タマンは1年を通して獲ることができる魚である．

1，女性たちのタマン漁

比嘉村落では，戦後になって釣竿とリールが普及するようになってから，女性たちも夜釣りの対象としてタマンを獲るようになった．このタマンは，夏頃によく釣れ，10月中旬から3月上旬頃までの間は，数は少ないが大きく成長したものが釣れるようになる．比嘉村落では，そのような大きなタマン釣りを楽しむために10月中旬から3月上旬頃までの時期に盛んにタマン漁が行われる．このようにして獲られたタマンは，自分たちの家庭で刺身や焼き魚にされて消費された．しかし，1980年代以後，比嘉村落の女性たちの高齢化が進み，行われなくなりつつある．

2，男性たちのタマン漁

男性たちも，女性たちと同様にタマン釣りを行う．

しかし，その他に男性たちは，戦前からパンタタカーとよばれる追い込み漁によるタマン漁を行ってきた．その時には，長さ70 mのフクロアミと，片方は100 m，もう片方は700 mのソデアミがついた網を使用する．この漁は5〜10人のグループによって，水深10 m以上の海域で行われる．このパンタタカーの場合，漁期は1年を通して行われるが，10月中旬から3月上旬頃には成長したタマンが獲れるため漁獲量が多くなる．パンタタカーによって獲られたタマンは，1970年代までは市場に販売されるものであった．だが，近年ではモズク養殖業が中心となっているため，もずく養殖の作業が落ち着く7〜9月頃に自分たちで食べるための分だけが獲られるようになっている．

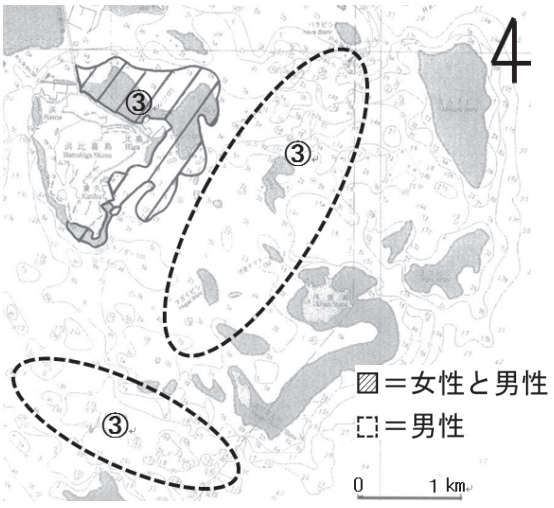


図6　タマンの漁場

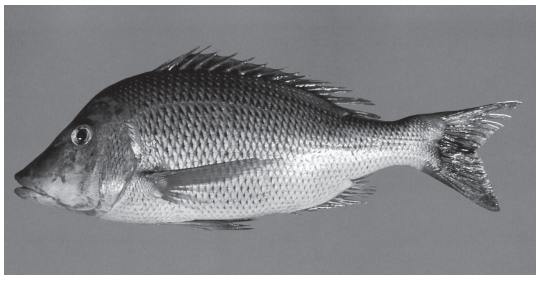


写真2　タマン
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977年より．）

④イラブチャー

イラブチャーは，ブダイ科の魚で，大きなものは体長70 cmを超すものもある．イラブチャーは，1年を通して獲ることができる．

1，女性たちのイラブチャー漁

比嘉村落では，イジャイによってイグミと呼ばれる銛を使って獲られる．イジャイとは，比嘉村落では，夜間の干潮の際に浅瀬を歩き周り魚介類を獲る漁撈活動である．イジャイは，夜間の干潮に行

われるため「潮のかわる日」から次の「潮のかわる日」までの間が漁期となる．このイジャイが始まる「潮のかわる日」は旧暦９月９日となっている．この日以降，それまで日中に干潮を迎えていた潮が，夜間に干潮を迎えるようになる．それによって，イジャイの漁期が始まる．それが旧暦３月３日のサングヮチャーという，女性たちの浜下りと，比嘉村落の海の神を司るという海勢頭家における祭祀が行われる日に，再び潮がかわり日中に干潮を迎える季節となる．そのため，イジャイは旧暦９月９日から旧暦３月３日までの間に行われる．このイジャイは夜間に行われるため，イラブチャーが夜間，浅瀬のサンゴ礁や岩の間で寝ているところを容易に突き獲ることができる．そのためイラブチャーは，このイジャイの時期によく獲られることになる．このようにして獲られたイラブチャーは，自分たちの家庭で刺身や煮付けにされて消費される．しかし，1980 年代以後，比嘉村落の女性たちの高齢化が進み，行われなくなりつつある．

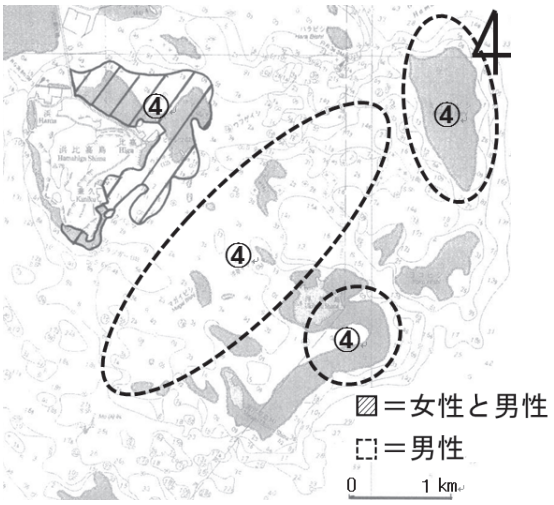


図７　イラブチャーの漁場

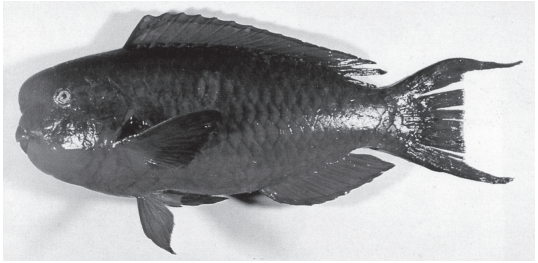


写真３　イラブチャー
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977 年より．）

2，男性たちのイラブチャー漁

男性たちも女性と同様にイグミで突き漁を行うが，その違いは，水深の深い場所でも行う点にある．消費のされ方については，同様である．しかし，1980 年代以後，もずく養殖により漁場が狭くなったため行われなくなりつつある．

⑤クスク

クスクは，和名ではゴマハギという魚で，体長は大きなものでも 20 cm に満たない．クスクは，９月中旬から 11 月上旬までの間が漁期となっている．それは，この時期にクスクが，比嘉村落の陸地近くのサンゴ礁の多い岩場に寄ってきており，それを獲るためである．この時の漁法は，スク網とよばれる比嘉村落の男性たちがスク漁に使う網を使用して行われる．この漁は５人１組で行われ，２人が網を張り，そこに３人でクスクを追いこむというものである．通常，スク網は，男性たちがスクを獲り販売するために使用する専用の網である．しかし，クスクの寄ってくる時期には，スク漁の時期はすでに終了しているため，女性たちがクスク漁にスク網を使用することができる．このクスクは，独特の臭いがあり，比嘉村落のなかでも好みのわかれる魚である．これを自分たちの家庭で煮付けや唐揚げにして消費した．このクスクを対象とした漁撈活動は，戦後しばらくまでは時期になると盛ん

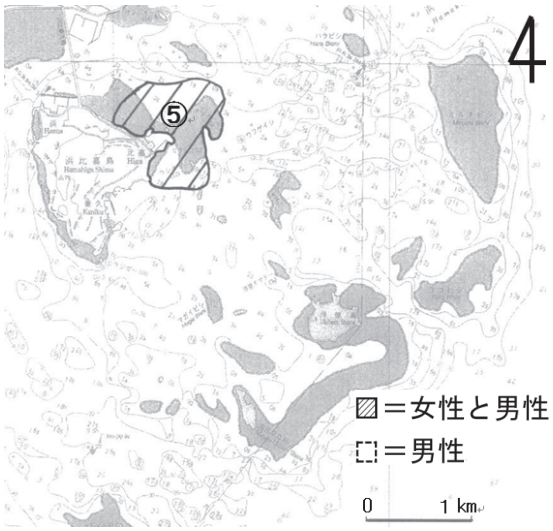


図８　クスクの漁場

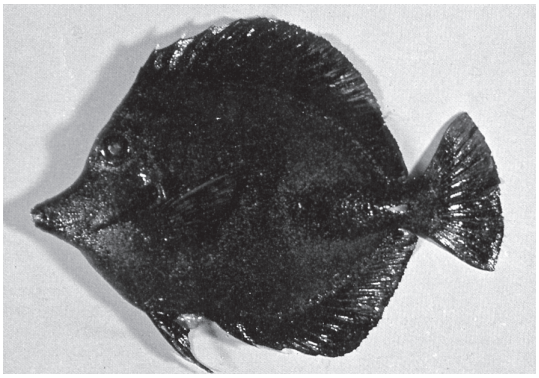


写真４　クスク
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977 年より.）

写真５　保管されているスク網

に行われたが，その後は次第に行われなくなり，1990 年代に入ってからは行われたことはないという．この漁は，男性たちは行わない.

⑥クブシミ

クブシミとは，コウイカ科のイカで，和名でもクブシミという.

1，女性たちのクブシミ漁

クブシミもイジャイにおいて獲られる．クブシミは，夜間は浅瀬の海草などにつかまり眠っているため，そこを容易にイグミで突き獲ることができるからである．また，夜間のクブシミは明りを当てると動きが止まる習性があり，そうなったところを突き獲ることもできる．このようにして獲られたクブシミは，自分たちの家庭で刺身にして消費される.

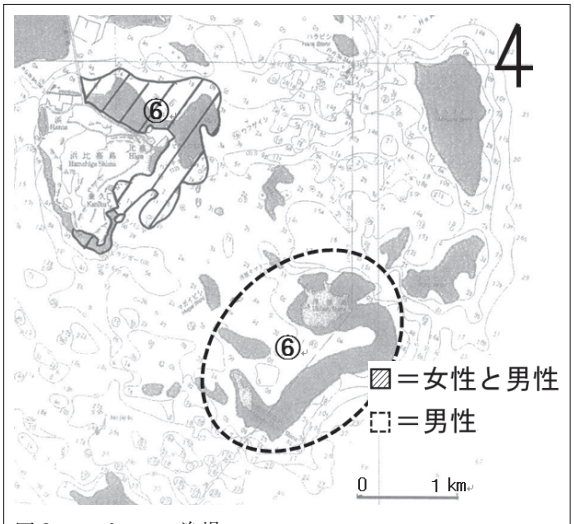


図９　クブシミの漁場

2，男性たちのクブシミ漁

男性たちも，クブシミ漁を女性たちが行うのと同様に行う．しかし，男性の場合は，舟によってさらに深い海域でも漁を行うことができる．また，この深い海域では，日中もクブシミがじっとしているために，日中もクブシミを獲ることができる．そのため，男性たちのクブシミ漁は１年を通して行うことがで

きる．

⑦タク

タクについては後述する．

⑧シーガイ

シーガイとは，マダコ科のタコ類のことである．

1，女性たちのシーガイ漁

シーガイは，イジャイの時期にイグンを使った突き漁，または直接手摑みによって捕獲する．このイジャイの時期になると，シーガイは「月を見ている」といわれるように，夜間，潮の引いた浅瀬の水中や岩にしがみ付いてじっとしている．また，夜間のシーガイは，光を照射すると赤く光り，どこにいるのか発見が容易である．そのため，手摑みでも比較的容易に獲ることができる．ここで獲られたシーガイは，自分たちの家庭で消費される．シーガイは，ぬめりを塩もみで落としてから茹でるか，生のまま刺身にして食べる．また，シーガイは，タマンなどの釣りの餌としても良いものとされており，釣りの餌としても使われる．

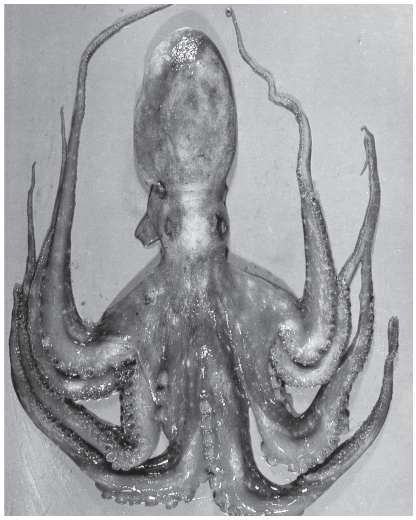


写真6　シーガイ
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977年より．）

2，男性たちのシーガイ漁

男性たちのシーガイ漁も，女性たちと同様に行われる．

⑨ガサミ

ガサミとは，ワタリガニ科の和名ガサミ，タイワンガサミ，ジャノメガサミ，ノコギリガサミなどのカニ類を総称する言葉である．ガサミは，1年を通して獲ることができる．

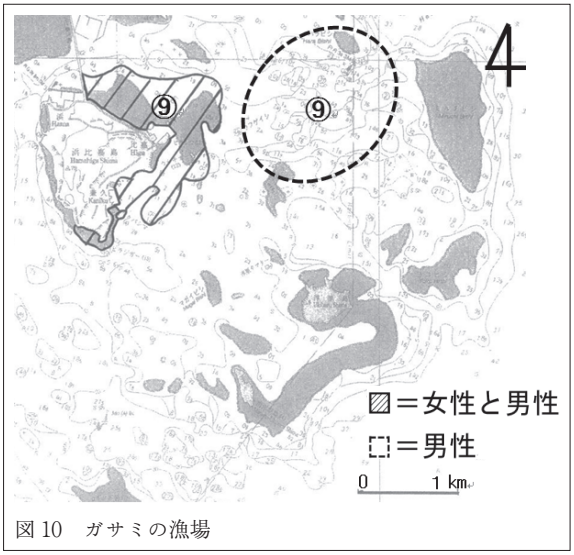


図10　ガサミの漁場

1，女性たちのガサミ漁

ガサミは，イジャイやカニカゴという漁具によって獲られる．このカニカゴの中に魚や魚のアラを入れて沈めておき，カニが入った頃に引き揚げるというものである．この漁は，カニカゴを漁港などにおいて沈めておくだけでよいため1年中行うことができる．しかし，ガサミは，10月から2月頃までの時期によく獲れるため，それ以外の時期の漁獲は少なくなる．ここで獲られたガサミは自分たちの家庭で消費される．ノコギリガサミは身が多いため茹でて身を食べるが，それ以外のガサミは身が少ないた

め味噌汁の出汁として消費される．

2，男性たちのガサミ漁

男性たちのガサミ漁も女性たちと同様に行われるが，舟で行うこともあるため女性たちよりも広い海域で行われる．

⑩カキィー

カキィーとは，カキ類の貝のことである．このカキィーは1年を通して獲ることができる．漁法としては，ドライバーなどの金属製の先端が尖った道具を利用して，岩に張り付いたカキィーを剝がして獲られる．だが，比嘉村落の誰もが獲るものではなく，出産後の女性たちやそのような女性のために獲られるものであった．それは，このカキィーが出産後の女性の母乳の出

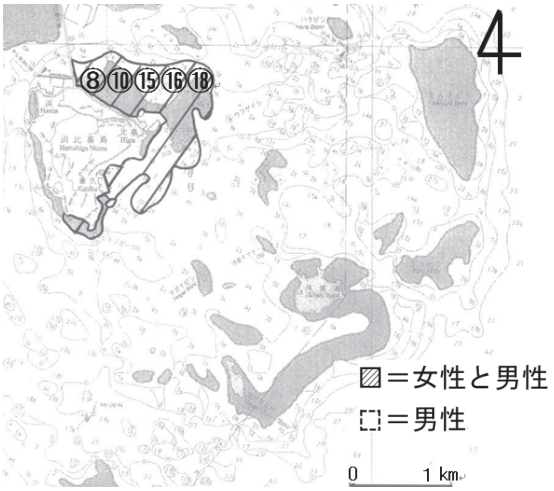


図11　シーガイ，カキィー，クジマ，モーモーグヮー，ギブナーの漁場

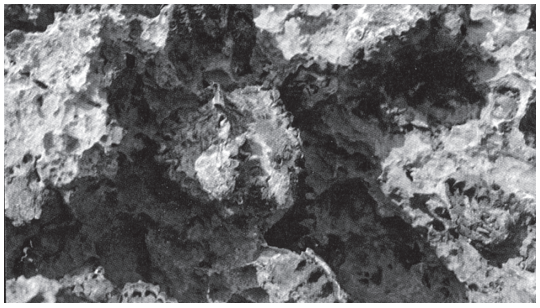


写真7　カキィー

に良いとされたためである．しかし，このカキィーは，戦後から次第に獲られる事が少なくなり，現在では獲られることはない．また，この漁は女性たちだけが行うものである．

⑪チーチャンナー

チーチャンナーとは，和名ではマガキガイという．

1，女性たちのチーチャンナー漁

チーチャンナーは，4月中旬から6月上旬頃までの時期に砂地に集まる習性があり，そこを手で拾い捕獲する．この習性は，リーフ内では深場から浅瀬までいたる場所でみられ，女性たちは歩けるほどの水深の浅い場所でチーチャンナーを獲る．チーチャンナーは，この時期を過ぎると砂に潜ってしまうため，獲ることができなくなる．このチーチャンナーは，貝類のなかでも美味の貝とされ，自分たちの家庭で茹でて消費する．

2，男性たちのチーチャンナー漁

男性たちのチーチャンナー漁も女性たちと同様の漁法で行われるが，舟を使用する事もあるため，女性たちよりも広い海域で行われる．また，男性たちが獲ったチーチャンナーは販売するためのものも含まれる．

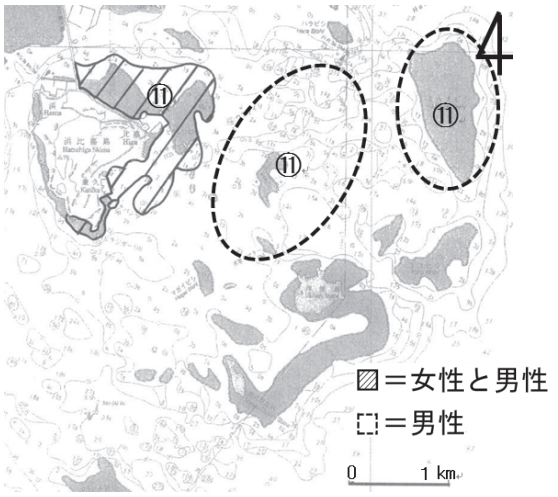


図 12　チーチャンナーの漁場

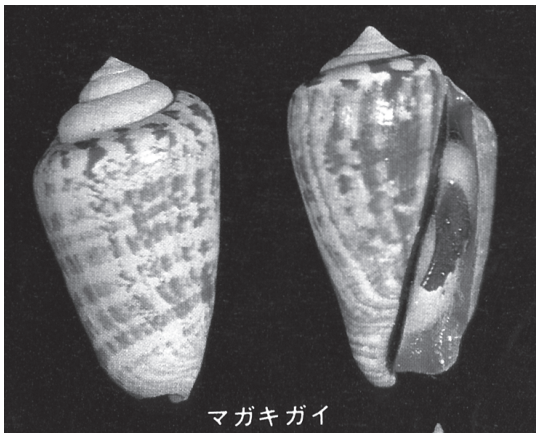


写真 8　チーチャンナー
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977 年より.）

⑫アジケー

アジケーとは，シャコガイ科の貝類のことである．アジケーは，1 年を通して獲ることができる．

1，女性たちのアジケー漁

アジケーは，サンゴ礁の隙間で成長する．そのため，アジケーを獲る際には，ドライバーやハンマーなどを使って，アジケーの周囲のサンゴ礁を破壊して獲る．女性たちは，このアジケーを歩けるような浅瀬の範囲内で獲っている．通常，アジケーのみを漁獲する目的で漁撈活動が行われることはない．しかし，比嘉村落では，アジケーは腎臓によいとされており，家族に腎臓が悪い者がいる女性たちのなかには，このアジケーだけを目的に漁撈活動を行う者もいる．このアジケーは，自分たちの家庭で刺身や腎臓の薬にする場合は，すまし汁にして消費される．

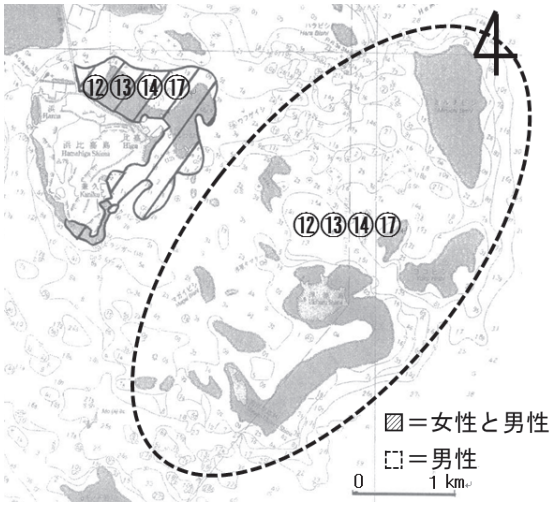


図 13　アジケー，ブートゥナー，ブルンナバー，ブラゲーの漁場

2，男性たちのアジケー漁

男性たちのアジケー漁も女性たちと同様に行われる．しかし，違いとしては，男性たちのアジケー漁は，女性たちよりも深い海域でも行われる点にある．そして，獲られるアジケーは，販売されるものがほとんどである．だが，1980 年代以降，もずく養殖の発展によりアジケー漁は行われなくなった．

⑬ブートゥナー

ブートゥナーとは，イモガイ科の貝のことである．ブートゥナーは，1 年を通して獲ることができる．

1，女性たちのブートゥナー漁

ブートゥナーは，サンゴ礁の隙間などにおり，それを女性たちは手で捕獲する．漁場としては，歩けるような浅瀬の範囲内で行う．このブートゥナーは，自分たちの家庭で茹でられて消費される．

2，男性たちのブートゥナー漁

男性たちのブートゥナー漁も女性たちと同様に行われる．しかし，違いとしては，男性たちは女性たちよりも深い海域でも漁を行う点にある．

⑭ブルンナバー

ブルンナバーとは，リュウテン科の貝のことである．その他は，⑬と同様である．

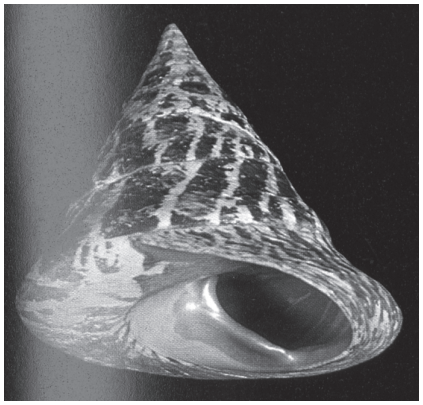


写真 9　ブルンナバー
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977 年より．）

⑮クジマ

クジマとは，ヒラザガイ類の貝のことである．クジマは，1 年を通して獲ることができる．このクジマは，岩に張り付いており，女性たちは歩けるような浅瀬の範囲内で，ドライバーなどの金属製の道具を利用して剝がして獲る．このクジマは，自分たちの家庭で味噌汁の出汁として消費される．男性たちは，この漁は行わない．

写真 10　クジマ

⑯モーモーグヮー

モーモーグヮーとは，アマオブネ科の貝類のことである．モーモーグヮーは，1 年を通して獲ることができる．

1，女性たちのモーモーグヮー漁

このモーモーグヮーは，岩に張り付いており，女性たちは歩けるような浅瀬の範囲内で，それを手で剝がして獲る．このモーモーグヮーは，自分たちの家庭で茹でられておかずとなるが，味噌汁の出汁としても消費される．

2，男性たちのモーモーグヮー漁

男性たちのモーモーグヮー漁も，女性たちと同様に行われる．

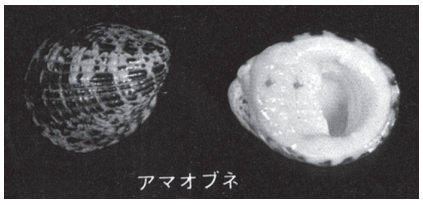


写真 11　モーモーグヮー
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977 年より．）

⑰ブラゲー

ブラゲーとは，和名ではホラガイのことである．ブラゲーは，1 年を通して獲ることができる．

1，女性たちのブラゲー漁

このブラゲーは，砂地に潜んでおり，女性たちは歩けるような範囲内でこれを手で獲る．このブラゲーは，自分たちの家庭で身を食べることもあるが，貝殻がきれいな場合は地面に埋め身を腐らせてから床の間に飾るなどして用いられる．

写真 12　ブラゲー
（白井祥平『原色沖縄海中動物生態図鑑』新星社，1977 年より．）

2，男性たちのブラゲー漁

男性たちのブラゲー漁も，女性たちと同様に行われる．しかし，異なるのは，男性たちのブラゲーが女性たちよりも深い海域でも行われる点にある．

⑱ギブナー

ギブナーとは，アラスジケンマガイ類やサルボウ類の貝のことである．ギブナーは，1年を通して獲ることができる．

1，女性たちのギブナー漁

このギブナーは，砂地に潜んでおり，女性たちは歩けるような浅瀬の範囲内でこれを手で獲る．このギブナーは，自分たちの家庭で茹でられて消費される．

2，男性たちのギブナー漁

男性たちのギブナー漁も，女性たちと同様に行われる．

⑲スヌイ

スヌイとは，モズク類のことである．現在の比嘉村落ではスヌイの養殖が盛んであるが，天然のスヌイは4月から5月頃までの時期に獲られる．

1，女性たちのスヌイ漁

このスヌイは，岩場に生えるため，女性たちは歩けるような浅瀬の範囲内でこれを手で摘み獲る．このスヌイは，自分たちの家庭で水に漬けて塩を抜いてから，酢の物や揚げ物の具，汁物の具として消費される．しかし，1980年代以降，もずく養殖がさかんになると天然のスヌイを獲ることは少なくなった．それは，わざわざスヌイを獲らなくても，養殖で獲れたスヌイが無料か安価な値段で入手できるようになったためである．

2，男性たちのスヌイ漁

男性たちは，1980年代以前は，イノー内の広い海域で天然のスヌイを獲り販売していた．しかし，1980年代以降，スヌイの養殖が比嘉村落の主要な産業となった．そのために，8月から10月はもずくの苗の採集，11月から2月は養殖網に種付け，12月から5月は種付けされた養殖網を海底に

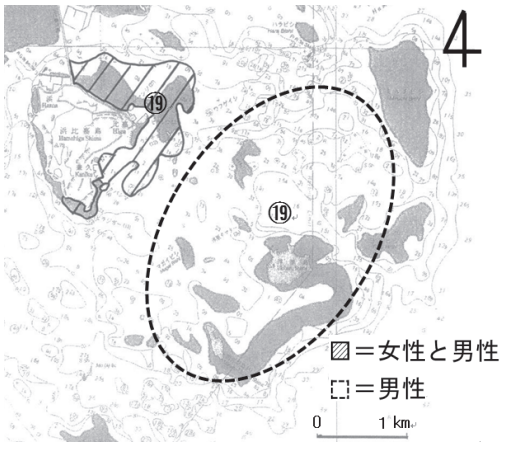


図14　スヌイの漁場

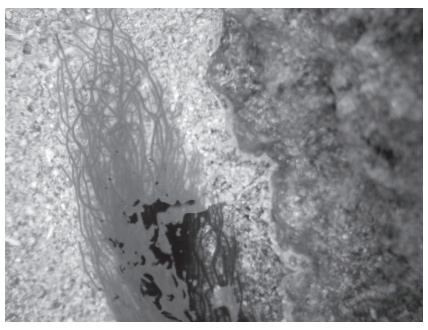


写真13　スヌイ

設置，4 月から 6 月に採集というように 1 年を通した活動となっている．

(3) タコ漁

比嘉村落では，タクトゥー（タコ獲りの意）と呼ばれるタコ穴漁が行われている．タクトゥーではタクと呼ばれる和名ではマダコ（学名：Octopus vulgare），または和名ワモンダコ（学名：Octopus cyanea）を対象とした漁が行われる．このタクは，海底に自然に生じた穴や窪みを住処としている．このタクが住処としている穴や窪みを，比嘉村落ではタクヌヤー（タコの家の意）とよんでいる．そして，このタクトゥーは 1 年を通じて行われている．その漁法としては，タクヌヤーに潜むタクを，まずイグンとよばれる銛で突き，タクがこのイグンに抵抗しようと絡みついてくる．その時にカキヤーとよばれる先端がカギ状になった銛を使って，タクをタクヌヤーから引きずり出して捕獲する．タクトゥーにおいては，タクヌヤーが破壊されない限り，何度でもそのタクヌヤーを利用してタクを捕獲できる．このようにして女性たちのタクトゥーは行われる．比嘉村落の女性たちにとってタクは日常の食材であり，年中行事や儀礼などの祝祭の場の儀礼食にも欠かせないものである．また比嘉村落においてタクは，ヒミチ（喘息や呼吸器系に関する症状の意）に対して効果のある食材ともされており，多様な価値をもっている．

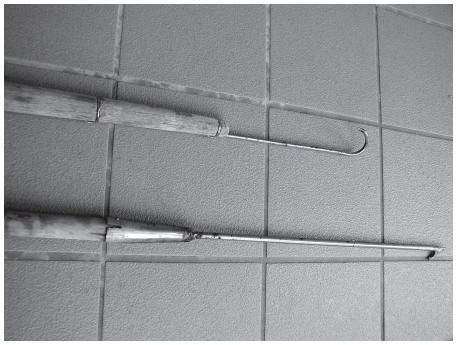


写真 14　イグン（下）とカキヤー（上）

一方，男性たちも女性たちと同様の方法で漁を行うが，男性たちは舟を使用するために女性たちよりも広い海域でタクトゥーを行う．また，タクトゥーは，日常の食材として，あるいは販売されるなどして消費される．

また，タクトゥーにおいては，比嘉村落の漁場利用の仕組みやその仕組みに関する考え方などがタクヌヤーという固定された漁場を通して明確にあらわれてくる．

比嘉村落の男性たちのタクヌヤーつまり漁場利用の方法としては，各個人が，その才能と努力とによってタクヌヤーを発見し，発見したタクヌヤーを自らのなわばりとする漁場利用が行われる．そして男性が発見したタクヌヤーは，他人はもちろん，自らの子どもにであってもその位置情報を伝えることはない．

そして比嘉村落の女性たちのタクヌヤー利用は，ヤガマヤーとよばれる比嘉村落内に存在した成年女性組織と深く関係する．比嘉村落のヤガマヤーは，1945 年から 1960 年代までの間に消滅している．このヤガマヤーは，比嘉村落において成人（10 代中盤頃）した女性，または比嘉村落に嫁いできた女性たちによって構成されていた．ヤガマヤーが機能している時期には，ヤガマヤー内の年長者の女性宅に集まり，世間話をしながら，内職仕事のパナマ帽編みなどを行っていたという話を聞くことができる．比嘉村落では，ヤガマヤーに入会するような年ごろの女性，結婚して比嘉村落に新しく嫁いできた女性がいると，ヤガマヤーの構成員たちがその女性を連れだってタクトゥーに出かけた．その時に年長の女性たちが新しく入会する女性に対し，タクヌヤーの位置情報を教えながら漁を行った．つまり比嘉村落の女性たちの間では，タクヌヤーの位置情報の共有とタクヌヤーの世代を越えた

継承が行われていたのである．

ヤガマヤーの消滅の理由については不明である．だが，いくつかの聞き取り調査から，ヤガマヤーが消滅した当時の比嘉村落の状況をみることができる．沖縄戦の戦後 1945 年から 1947 年までの間，比嘉村落の人々は，アメリカ軍から十分な食料配給をうけることができ，食べ物に困るということはなかったという．そして女性たちは，使わなくともよくなった畑や水田をアメリカ軍から要請のあったトマトなどの生鮮野菜栽培に利用した．それによって金銭収入を得ることができた．男性たちも，沖縄本島での軍作業や水没したスクラップの引き揚げなどによって金銭収入を得ることができた．この時期には，食料の心配をすることなく，金銭収入を得ることへ集中できた時期であった．このような状況が，ヤガマヤーという相互扶助的な面を持つ組織を不要なものにしていったと考えられる．

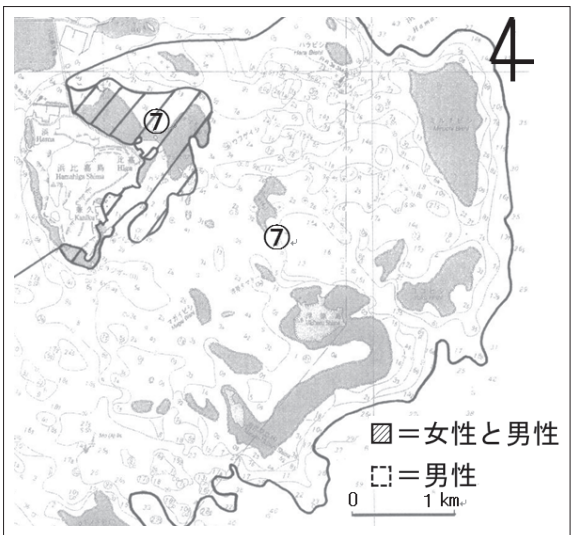


図 15　タクの漁場

ヤガマヤーの消滅後，女性たちのタクヌヤーの世代を越えた共有は行われなくなる．しかし，それ以前からタクヌヤーを共有していた女性たちの間での共有は機能し続ける．このような女性たちは，1990 年代まで共有していたタクヌヤーでタクトゥーを行っていた．だが，現在では，タクヌヤーを共有していた女性たちの高齢化が進み，自然とタクヌヤーの共有は消滅しているという状況である．2009 年の時点では，タクヌヤーの位置情報を共有している女性は 3 人のみとなっている．そのなかでは，最年少の方が大正 13 年生まれの女性となっている．

このように，女性たちのタクヌヤーの共有は行われなくなったが，新しい世代の女性たちがタクトゥーを行わなくなったというわけではない．この新しい世代の女性たちは，男性のタクトゥーのように，自らの努力によってタクヌヤーを発見していき，それを誰にも伝えることなく，自分自身の財産のように利用している．

そして，現在の比嘉村落のタクトゥーは，1980 年代を境に変化がおこった．つまり，1980 年代に，もずく養殖という新技術の導入によってタクトゥーやその他の漁撈活動を行う海域の減少がおこり，それによって，従来から行われてきた漁撈活動全般に影響が出たのだ．

結論

まず，比嘉村落の女性たちの漁撈活動は，男性たちのそれに比べ漁場範囲が限られていることがわかる．それは，舟の使用の差とも関わるが，男性が広い海域で活動するのに対して，女性の活動海域は水深の浅い陸地周辺となっている．

また，消費のされ方の違いについてみてみると，男性は換金と食用のために漁撈活動を行っているのに対して，女性は食用のために魚介類を得る漁撈活動を中心に行っていることがわかる．これは，

糸満の女性たちの漁撈活動への関わり方とは異なるものである．

さらに，女性の漁撈活動によって得られる魚介類の消費にみられる特徴としては，喘息や腎臓，母乳の出に良いとされる効用のある魚介類を必要なときに獲得することである．それについては，糸満の女性たちの魚介類の販売の際に，個々の魚介類のもつ季節性や効用などの民俗的知識をもとに接客を行っているという川端の研究成果がある（川端 1998）．また，久高島の女性たちの漁撈活動によって獲得される魚介類の消費のされ方のなかで，シャコガイ類やハリセンボン，マクリとよばれる海草が薬用として自家消費または換金商品にもなったという熊倉の研究成果もある（熊倉 1998：206-207）．

これらの成果と本研究における調査内容をもとに考えた場合，女性たちの漁撈活動には1年のうちある季節にだけ獲得される魚介類を対象としたものの他に，1年を通して獲得が可能であり，なおかつなんらかの効用をもつとされる魚介類の獲得を目的とした漁撈活動のひとつの意味であったと考えられる．

そのような効用をもつ魚介類を必要とする場合には，緊急的に必要となる場合もあれば，継続的に必要となる場合もある．そのような性質を女性たちの漁撈活動はもっていたために，男性とは異なる漁場利用の仕組みを構築したと考えられる．その漁場利用の仕組みの特徴について，比嘉村落の女性たちのタクトゥーの事例の分析からみていく．

比嘉村落の女性たちは，個々に獲得したタクヌヤーの位置情報を，一度，成年女性組織のなかで共有する．それは，比嘉村落の女性たちは，努力や才能や技量といった個人差によるタコの漁獲量の差についての影響をなるべく排除しようとするものである．

まとめると，比嘉村落の女性たちは，男性に比して狭小な漁場のなかで漁撈活動を行い，そこで獲得される魚介類は，日常に食される他に，特別の疾患に効用のある魚介類としても消費された．そのため，1年間を通して継続的な利用と同時に，緊急的に獲得する必要のある魚介類を獲得する漁場利用の仕組みを形成してきた．それが，個人のタクヌヤーを組織で共有する形としてあらわれている．このような比嘉村落の女性たちの漁撈活動のもっていた生計維持の上での意味を分析することができた．

しかし，このような女性たちのもっていた生計維持の上での意味合いは，1980年代を境にして変化をみせる．この変化の特徴は女性たちの漁撈活動が減少したという点にある．女性の漁撈活動全体が1980年代以前のようには盛んに行われなくなってきている．また，なかには1980年代以降には行われなくなった漁撈活動も存在する．この背景には，比嘉村落は2012年6月30日現在，65歳以上の人が人口に占める割合が約36%，女性の人口に占める65歳以上人口の割合は約47% となっており，女性たちの高齢化の進行がある（うるま市役所 2012）．また，そのほかにも戦後の賃金労働や換金作物栽培の進展などの影響がうかがえる．今後，このような現代における比嘉村落の女性たちの漁撈活動とその活動がもつ意味について考えることが必要となる．

参考文献

Tomoya, Akimichi. Kenneth, Ruddle.　1984　国立民族学博物館：The Historical Development of Territorical Rights and Fishery Regulations in Okinawan Inshore Waters. Senri Ethnological Studies17: 37-88

沖縄県沖縄史料編集所編　1981 『沖縄県史料』前近代 1，沖縄：沖縄県教育委員会.
沖縄県内務部第一課　1892 『沖縄縣統計書』明治 23 年，沖縄：沖縄県庁.
奥野彦六郎　1977 『沖縄の人事法制史』東京：至言社.
加藤久子　1990 『糸満アンマー』沖縄：ひるぎ社.
加藤久子　1994 「糸満における漁業の変遷と妻たちの労働」『歴史評論』第 529 号：38–46，東京：校倉書房.
河上肇　1982 「琉球糸満の個人主義的家族」河上肇『河上肇全集』第 6 巻：pp. 317–333，東京：岩波書店（初出は 1911 年）.
川端牧　1998 「民俗知識で彩られる魚」『エコソフィア』第 2 号：87–101，京都：昭和堂.
喜舎場永珣　1934 「八重山に於ける舊來の漁業」『島』下巻昭和 9 年前期：299–322，東京：「島」発行所.
熊倉文子　1998 「海を歩く女たち」篠原徹編『民俗の技術』pp. 192–216，東京：朝倉書店.
白井祥平　1977 『原色沖縄海中生態図鑑』沖縄：新星図書.
瀬川清子　1976 「漁村の婦人のはたらき」瀬川清子『十六島紀行・海女記断片』pp. 134–157，東京：未来社.
多和田真淳　1980 『古希記念多和田真淳選集』考古・民俗・歴史・工芸篇，沖縄：古希記念多和田真淳選集刊行委員会.
西村朝日太郎　1969 「漁具の生ける化石，石干見の法的諸関係」『比較法学』第 5 巻：73–118，東京：早稲田大学.
野口武徳　1969 「沖縄糸満夫人の経済生活」『成城文藝』第 56 号：11–35，東京：成城大学.
比嘉・兼久集落民俗調査報告書編集委員会編　2007 『みんぞく』第 19 号，沖縄：沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科アジア文化ゼミ.
外間守善，波照間永吉編　1997 『琉球国由来記』東京：角川書店.

参照ホームページ

うるま市役所　2012 年 7 月 25 日参照 「大字別年齢別総計表（日本人）」
http: //www.city.uruma.lg.jp/DAT/LIB/WEB/1/ooaza_nenndai1206.pdf
沖縄県水産課　2011 年 11 月 25 日参照 「特定区画漁業権，定置漁業権の設定状況」
http: //www.pref.okinawa.jp/suisan/2gyoumu/tokku-teidhi.pdf
沖縄県水産課　2012 年 7 月 25 日参照 「モズクの養殖生産量，生産地」
http: //www.pref.okinawa.jp/suisan/mozuku.html
沖縄県もずく養殖振興会　2012 年 7 月 25 日参照 「モズクの生産量」
http: //www.mozukukyo.org/?page_id=2